

有明夏夫 悲恋の池



中央公論社

月明夏夫

恋恋の池



悲恋の池

一九九〇年二月一〇日 初版印刷
一九九〇年二月二〇日 初版発行

著 者 有明 夏夫

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二 八・七
振替 東京二・三四

©1990 CHUOKORON-SHA, INC.
Printed in Japan

ISBN 4 12 001901-2

目次

悲恋の池

5

目覚まし時計の謎

57

法隆寺への道で

111

お菓子の墓

165

白いジャケットの女

219

装
幀

井
出

文
蔵

悲
恋
の
池

悲恋の池

1

「できたあ！」

原稿を書き上げた獅子天陽子は、快活に叫んで背伸びをした。

「間に合うたねえ」

待っていたパート勤務の勝本民枝が、時計を見ながらいう。五時を十分すぎていた。

「誤字脱字がないかどうか、ちゃんと確認しておくんだよ」

社長兼編集長の猪熊健二は、すこし嫌味をいった。ワープロで文章を書く「構成」が「更正」になったり、「話す」が「離す」になったりするものだが、陽子は特にひどかった。長い外国暮らしのせいだろう。

「大丈夫です。入念にチェックしました」

そういって、陽子はプリントを取り始めた。明日になってもいいのだが、インタビュー記事は、印象が鮮明なうちに書いてしまいたいといって、帰ってくるなりキー・ボードを叩きだしたのだ。

『南都通信』の次号では、恒例の「三分間インタビュー」に、福島県の郡山市こわりやまから来訪したミス采女うねめを予定していた。今夜、猿沢池のほとりで挙行される采女祭の主人公である。きょうはあまり時間がないだろうから、無理しなくてもいいよ、と健二はむしろ押さえたのだが、陽子は要領よくミス采女の控え室に潜りこんで、ちゃっかり談話をもらってきた。

その陽子は、子供の頃に見た采女祭の記憶をほとんど失っている。だから今夜は絶対欠かせないであって、パートの民枝と一緒に見物に行く約束をしていた。幸い、文句なしの中秋の名月になりそうである。

「はい……これ、お願いします」

陽子はプリントを健二のデスクの上に置いた。

「ほいきた。あとはいいから、早く行きなさい」

「編集長はまだお仕事なのに、申しわけありませんねえ」

「いまさら恐縮することはないだろう」

「それもそうですね。こんなことでいちいち恐縮したら、身が持たなくなっちゃう」

いうことは図々しいのだが、陽子の場合にはそれが愛らしくきこえる。育ちの良さと美人の徳というやつだ。

「これからすぐに猿沢池へ行くの？」

「いいえ、近所でちょっとピザなどを食べてから、向こうへ行きます」

「間に合うかな？」

健二は民枝に顔を向けた。

「奉納行列の出発は五時ですけどね、船が出るのは八時頃やさかい、充分間に合います」

子供の頃に見ただけなので、健二もよくは憶えていない。

「さあ、行つてこようと……」

陽子はカメラを肩にかけた。

「写真まで撮つてこなくていいよ」

健二はあわてていった。『南都通信』はミニコミ誌であつて、祭の写真まで掲載するスペースはないのである。

「いいえ、これは私製の絵葉書用に撮るんです。そのうち、すつごくかわいいセットを作つて、編集長にも進呈しますから、楽しみにしてて下さい」

「ああそう……」

カメラマンとしての陽子は、文章よりはいいセンスを持っている。面白いセットを作るかもしれない。

「さあ、ぼちぼち行きましょうか……」

民枝が立ち上がると、

「そうね。きょうは自転車置いて帰りますから……」

と、陽子は健二にいった。

明日はどうして出勤してくるのか知らないが、そこまではきかずに、健二は出てゆく二人を見送った。編集長の彼には、まだ広告の割付の仕事が残っている。

獅子天陽子は、今年の春に南都通信社の一員に加わった。

変わった名前だが、奈良では一、二を争う名家である。祖父の獅子天角左衛門かきざゑもんの名は、吉野の山林王として、日本中に知れ渡っている。株式の世界でも、吉野ダラーの一人として有名ならしい

が、その方面に暗い健二にはよくわからない。政財界のみならず、美術や骨董の世界にも影響力を持つてゐるとの噂も高いが、南都通信社の社長程度では、想像のつかぬ存在だった。

そんな家の子女が、なぜ吹けば飛ぶようなミニコミ通信社へきたのか、これまたわからない。アメリカのコロンビア大学で、スペイン文学を専攻したというから、もっと世界に羽ばたく場所がありそうなものだが、奈良へ帰って働きたい、という強烈な希望で帰国してきたのである。

南都通信社で雇ってもらえまいかという打診は、獅子天角左衛門の側近が持ちこんできた。健二としては、ようやく経営が軌道に乗ったばかりのところで、たしかにアシスタントは欲しいものの、到底満足のゆくような給料は払えない、と一旦は断わった。が、その点なら大丈夫、必ず給料分以上に収益があるように計らうから、という条件を出してきたので、引き受けざるを得なかった。

結果から見れば、陽子の採用は大成功だった。『南都通信』は無料配布の形を取っているのもっぱら広告料が頼りなのだが、獅子天陽子を雇ってから、やにわに掲載の申し込みが増えてきたのだ。角左衛門の差し金によるのか、陽子が朗らかに動きまわっているだけで、付き合っておこうと考えるスポンサーが出てきたのか、そのあたりも不明だが、いずれにせよ収益は急上昇している。猪熊社長としては、予は満足じゃ、の心境だった。

そのお蔭で、編集長としての健二はしばしば残業を余儀なくされることになった。ページ数を増やさないと、広告スペースを広く取り、その上読みごたえのある紙面を作るのは、非常にむづかしい。このところ、毎号苦心の編集を強いられていた。

中秋の名月の夜、奈良の各地では観月の催しが行われる。唐招提寺観月会、明日香万葉観月会、大和郡山の慈光院観月会……いずれも有名で、参加する人は多い。

奈良市の中心部で催されるのは采女祭である。

采女祭の花扇奉納行列は、餅飯殿町の大宿所を出たあと、JR奈良駅前から三条通りを東へ進み、猿沢池をまわって采女神社に到着する。それは例年、六時前後になる。

「ああ、きたあ！」

近づいてきた高張提灯を、人の肩ごしに見て、陽子は無邪気に大声を上げた。

「ほんと……いい頃加減やねえ」

月の光を背に、ほんのり明るくなってきた春日山を仰ぎながら、民枝は感嘆したようにつぶやいた。

「ゾクゾクしちゃう！」

幼い時分に、陽子は見ているはずだというのだが、ほとんど記憶にない。ほんのすこし脳裡に残っているのは、池をまわる竜頭船や鷗首船がおこす波紋の上で、満月がゆらゆら揺れていた光景だけである。

「あ、先発がきた」

と、民枝。

「男の人が赤い衣を着てますね。あれはなぜ？」

「そんなこと、知りません」

陽子の質問を、民枝はもてあましている。

「次にきたのは神主さんね」

「うん、それはまちがいないわ。あれは狩衣かりぎぬやから」

そのあとには巫女みこの行列が見えた。が、引き続きやってくるグループとなると、もう二人には見当がつかない。やがて直垂姿じきたれの一群を見つけ、あれが南都楽所なんとがくせの伶人れいじんたちで、雅楽を担当するミュージシャンだろう、と想像してみるだけである。やがて、長い稚児ちごの行列に変わった。

「ミス采女はまだなの？」

「もうすぐや思うけどね」

だが、すぐではなかった。百名をこす長い稚児行列に続いて、花扇車、花扇使、風流傘、そして再び高張提灯がきたあとに、ようやく布衣姿ふいのミス采女を乗せた御所車が姿を見せた。猿沢池のほとりで待ち受けていた人々の間に、どよめきが走る。

ミス采女は、福島の郡山市から招く。そのいわれは平安中期に書かれた『大和物語』に出ている。

文武天皇ぶんぶの御代に、寵愛ちやうあいを受けた采女がいた。ところが幸せだったのは束の間で、いつしか帝の気持は他の女に移ってしまった。そこで世をはかなんだ彼女は、猿沢池のほとりにあった柳の木に衣をかけて入水したのである。当時の陸奥国むつくには郡山から召された女だったという。

郡山市にも、采女祭はあるらしい。そこで、かの地で選ばれたミス采女を、奈良へ招待することになった。いまでは直垂姿の従者を引き連れて、采女祭の主役といってもいい。

神前に花扇が立てられた。同時に雅楽が始まり、神饌しんせんが供えられる。続いて、祝詞のりとが上げられ、

玉串の奉納が行われた。

花扇を竜頭船に移すあたりで、祭はクライマックスに達する。

用いる船は二隻である。花扇や雅楽の伶人たちを乗せる竜頭船、いま一隻の鷓首船はミス采女や従者たちを運ぶ。雅楽の調べが鳴り響く中で、二隻の船はゆっくりと池を三周。中秋の名月は春日山の上にあつて、人間たちのささやかな営みを照らし出す。最後には、ミス采女が花扇を池のあちこちに投げて……。

陽子は夢中でシャッターを切っていた。『南都通信』に使ってもらえないのは残念だけれど、なに、そのうち采女祭の写真があつたなあ、などと猪熊編集長はいいだすにきまっているのである。よそから借り出しにくるかもしれない。そういう需要がないとしても、彼女のオリジナル絵葉書に使えるような、しっかりしたもの撮っておきたい。

「ああ、あの人！」

不意に民枝が叫んだ。

その声におどろいて、陽子が民枝の指差す方向を見やると、どうやら女性が倒れた様子である。もつとも、その現場までは十メートル以上離れているので、到底近づくことはできない。それに、そばの人たちが協力して、倒れた女性を担いで運びだそうとしているようだ。

「どうしたのかしら？」

「さあ……貧血でもおこさばったんちがう？」

「これだけの人ごみだもの、無理もないわよね」

二人が気づかわしげに眺めていると、女性を抱えた人たちは、春日参道のほうへ動いてゆく。直接には見えないのだが、叫び声と人波の揺れ具合でわかった。

その時、これが古都に起きた殺人事件の前触れになろうとは、二人の夢想もせぬことだった。

3

猿沢池で倒れた女性は、単に貧血をおこしただけだったらしい。そのことは翌日にわかった。

「あの人を助けた中に、偶然わたしの知り合いがいてましてん」

午後から出てきたバートの民枝は、健二と陽子の顔を交互に見ながらいった。

「倒れたのは奈良の人？」

陽子がきいた。

「いいえ、観光客。平城苑に泊まったはってんて」

「ふーん、そんなら宿へ連れて行って一件落着やったん？」

健二も民枝に対しては、奈良弁になる。

「いいえ、それもなし。貧血はしょっちゅうやから、ハンケチを濡らしてきて欲しい、いわはりましてんて」

ベンチに横たわった彼女は、そのハンケチでしばらく鳩尾みずおちを冷やすうちに、元気を回復していったという。誰かが旅館まで送ろうとしたのだが、それを丁重に断わって、一人で歩いて帰ったそうだから、まずは軽微な事故だったといえる。

「女性にはそういう人が多いんですよねえ」

貧血などとはまるで縁のなさそうな陽子という。民枝が答えて、

「わたしもいろいろ故障は抱えてるけど、貧血だけはしたことがないわ」

と、そんな話になったところへ、立て続けに電話が入って、三人は忙しくなった。奈良には年中行事が多いから、いつまでも采女祭にばかりはこだわってられない。

その翌々日の朝、無理心中らしい事件が発覚した。

24号線沿いの法華寺町にあるニュー白鹿というモーターで、絞殺された女と服毒死した男の死体が発見されたのである。宿帳に記入していた住所氏名はデタラメだったが、男は運転免許証を持っていたので、郡山市に住む後藤孝・四十二歳と判明した。女の身許はわからない。

この事件はテレビ奈良が夕刻と夜のニュースで流した。新聞各紙の奈良版も、翌日の朝刊で一斉に報道したが、扱いが小さいせいもあって、南都通信社の三人は誰もたいして気に留めなかった。

民枝が好奇心を全開した面持で、事件の新たな展開を二人に告げたのは、采女祭から数えて五日後のことである。

「ちょっとちょっと、こないだの心中事件憶えたはります？」

民枝は仕入れてきたばかりの衝撃的なニュースをぶつけた。

なんと、ニュー白鹿で殺された女性は、猿沢池で貧血をおこした平城苑の宿泊客だったのである。名前は野村加代といい、九日前から逗留していたが、四日前、つまり采女祭の翌日の夜から忽然と姿を消しているため、旅館が警察に届けたところ、写真を見せられて、同一人物だと判明したもののらしい。平城苑でチェック・インした折の記帳によれば、彼女の住所は福島市になっていたとの由。

「じゃ、それまで身許はわからなかったの？」

「そうとちがうかしら」

「同じ県の郡山の男と福島のが、奈良で采女祭の翌々日に、心中死体で発見か……」
健二は腕組みをした。

「わざわざ旅館を出て、モーターで心中とは、ちょっとおかしいですねえ」

民枝は二人の顔を交互に見た。

「そもそも、平城苑では何人で泊まっていたの？」

と、陽子。

「それがね、一人だけですわね。もっともツインやったそうやから、誰かを待っていたんやないか、と旅館の人は想像してたらしいけど……」

「ツインって、あの旅館は洋式だった？」

正倉院しょうそういんの北側の丘陵にある平城苑は、奈良では有名な旅館だが、陽子は純日本式だと思いこんでいたようである。

「両方あるねん。あそこの東側は、みんな洋式になってるそうやわ」

「へえ、そうだったの」

「一人旅の女性が、同じ旅館で五日間も逗留してるのは、ちょっと不自然やなあ」

なおも不思議がる健二に、

「そうですわね……」

陽子が相槌を打った。「たとえば貧血症で体が弱いとしても、それだけの期間があれば、もうちょっと南のほうへ行ってみるのが普通だと思いませんか？」

「うん。大抵の人なら、そういう行程を組むだろうなあ……しかも、貧血には慣れているらしいから、そう気には病んでいなかったはずだしね」